

水とは

地球の表面積の70%は海。そして、人の体重の70%以上は水です。

あらゆる物質は、水の存在なくしては、形あるものとして存在できません。地球上の環境化において造り出された「真空状態」についても、大いに「水」は存在します。

私たち人間をはじめとした動植物、生命体の世界、天然鉱石から化学合成物質までのいわゆるモノの世界、そのすべての世界において、本来の目的を機能させるためには、形あるものに含まれる“水”がどれだけ安定しているかによって、存在の維持、さらなる成長が左右されています。

生命体は優れた基本システムを持っています。それは「必要なものを取り入れ、不必要なものを取り入れない」という生態システムです。この機能が正常に働いていると、生活環境において無意識のうちに摂っている、有害物質や化学物質も自然と排泄され、生命体に大きな影響はありません。その基本システムの大役を担っているのが“水”なのです。

水の不思議をひもとく

水で考える美しいバランスと循環 すべては水から

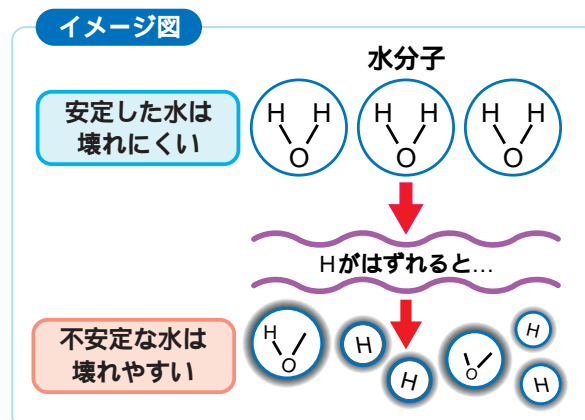
物質の世界においても、その物質が安定した働きを維持するには水が関係しています。水の働きを知ることは、特に産業界において、製品の安定性や品質管理上、必要不可欠なポイントになります。物質内の結合水の密度が高く安定していると、結合性の強い「結合水」が多く含まれ、物質は安定します。結合水の密度が低く水に空隙が大きくなると、結合性が弱まり「自由水」が多くなり、合成が弱まることで、物質は早期に朽ちやすくなります。構成物質の種類にもよりますが、安定した結合水が多く含まれると物質構造が安定し、その本来の機能を十分に発揮するのです。

人体、物質の両方に共通する“いい状態の水”とは、分子間の距離が短い、または水分子の大きさが均等で、水に密度があり、結合力が強い水ということが言えます。

今日の地球環境を循環している水は、水分子間の引力が弱く、水が部位により、密度にばらつきが発生し、結合性が弱いため、他の物質に影響されやすくなってきています。そのことにより、原因不明の病気の増大、自然環境システムの崩壊を招いています。そしてまた、産業製品の品質の劣化にもつながっているのです。

生命体、物質には本来優れた存在を維持するシステム・メカニズムが備わっています。その生存環境や内部に含まれる水の状態が整えられていれば、自然といい状態で生命体、物質構造の維持が可能になります。

“水”本来がもつ、その優れた機能は、生体に流れる生体水をひも解くことにより、明らかになります。水の優れたはたらきを理解することで、あらゆる分野の物質反応のメカニズムが明らかになり、様々な未解決な問題に応用が効くこととなります。



生体水の働きを見る 水による驚くべき生体システム

人、動植物に流れる生体水。そこには生命の神秘と呼ぶにふさわしい優れた生態システムが存在しています。人体内では、常温(摂氏36.5度前後)一気圧の環境で、超臨界水(摂氏数百度数百気圧)が引き起こす物質反応の世界が容易に行われ、-80℃まで凍結しない水が存在し、熱帯雨林の高温の世界でも正常に機能しています。この生体水の特徴とはいかなるものなのでしょうか。生体水の特徴は主に3つあります。それをひも解いていきましょう。

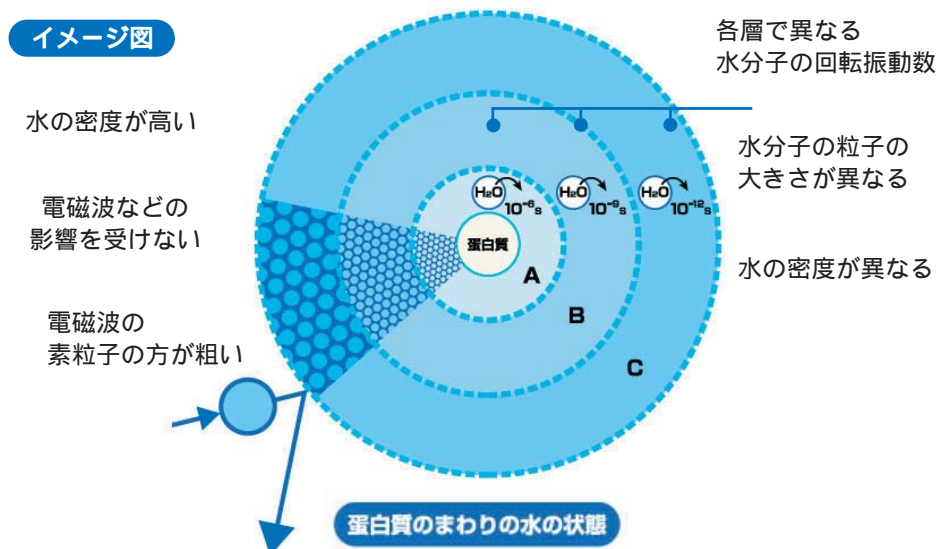
(1) 生体内のものはすべて「水の器」でくまれ、運ばれています。

生体内の水はきわめて粒子が細かく、水に密度があり、水として安定し、活力ある状態にあります。水道水などの普通水と比べると、その安定性には大きな差を示します。

そして超微粒子の世界の生体内では、タンパク質やアミノ酸、すべての物質が「水の器」に包まれ、全身に運ばれていきます。

細胞は「水の器」で包まれたタンパク質、アミノ酸、ビタミン、ミネラルを必要なものだけ摂取し、不必要なものは取り込まず排出する生態システムにのっとり細胞活動を維持しています。異物はすべて水の器に包まれた状態で害を及ぼさず、尿や便、汗などとなり、排泄されています。

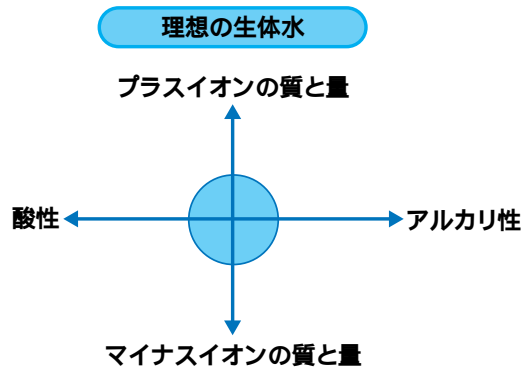
病を引き起こす人と引き起こさない人の差は、摂取した水を活力ある生体水に整えられるか否かによっています。



(2) 生体水は中性で、一切の電位のかたよりをもっていない。

生体水はまったくの中性です。胃液が強酸性なのは、水 + 酸性物質が多い状態ということを示しており、生体水自体が酸性になっているわけではありません。生体内での酸性、アルカリ性状態はアミノ酸類やヘム基の存在によっています。

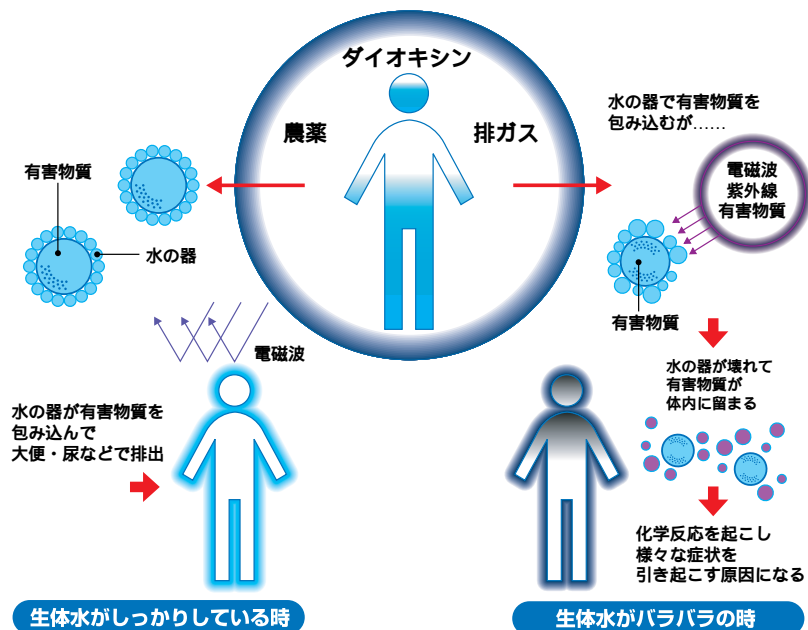
実験である種のアミノ酸がアルカリ性の環境のみで働くことがわかっていますが、これは人工的な実験環境によるものであり、生態内のシステムを示すものではありません。



(3) 生体水は容易に分子が崩れる水ではない

きわめて超微粒子化された生体水の世界では、電磁波や磁気など多少の電位が与えられても、水の器現象や水分子は容易に崩れることはありません。

高電位を持った岩石などは自然環境の中に存在しています。生命体の発祥地点で、コンピューターや携帯電話の電磁波程度の影響により崩れる生体水であったとすると、今日のこれだけ豊かな生態系をもつ地球の存在はなかったのではないのでしょうか。本来の健康な生体水であれば、環境の影響を顕著に受け、原因不明とされる病が生じることもないはずです。



結合水 自由水の異なりをみる

結合水とは

結晶、水溶液、ゲル、生体組織、土壌などで、その物質・物体の構成成分に結合している水

自由水とは

気化しやすい水。熱(加熱や太陽光)などで簡単に蒸散する水

水を分類するための区分としては、蒸散しやすい水、蒸散しにくい水という分け方もありますが、結合水の中にも蒸散しやすいもの、よりしにくいものが存在しています。地球上のすべての物質(金属・プラスチック・紙・布・革・ガラス資材すべて)形ある物質は、結合水、結晶水の存在により、粉体化されずにその形状が保たれています。

樹木 木製品は変化がわかりやすいが、木が朽ちるとは水分(保水性)がなくなることにより、木の細胞間のつながりがなくなることによって起こります。建材類でわかりやすいものに、木製品以外にコンクリート建築物が朽ちることも、ある程度以上、水が含まれる率「含水率」が低下したとき、内部崩壊(内部酸化現象)が起こり、一気に強度剛性が低下します。

木造建築物で奈良斑鳩にある法隆寺の建物は、1,300年を超えてなぜ朽ちることがないのでしょうか。これは、結合水の異なりによるもので、さらに蒸散しにくい結合水を保ち、含んでいるヒノキ(スギ)による建築物であることがうかがえます。当時の設計や建築に携わった人々はある地域のヒノキ(スギ)が朽ちにくいことが調査済みであったと思われます。しかし、この結合水による保水率の異なりで、さぞかしその重量により、運搬はかなり困難なものがあったと思われます。また、加工においてもさらに難しかったことが考えられます。しかし、当時の担当者はこの地域のヒノキ(スギ)を選んだ…のです。

その並大抵ではない耐候性、耐久性がすべてを制するポイントになっているからです。

結合水の異なりや結合水の安定性が、すべての

建材の耐候性、耐久性を左右します。たとえ、金属であっても、その素性が崩れることがあります。それは、「含水率」がある程度以上一気に低下したときにおこります。建材に水は大敵、とされる「水」とは、自由水(相手に付着し、蒸散する時に相手の物質を解離させ、一緒に蒸散させてしまう…建材が劣化する)の悪さによるものです。

建材類を含む物質の早期の劣化を防ぐ(建材に使用される各剤も含め)には、その結合水をいかに安定させられるかの一言につきます。VOC類の発生とは、この物質に存在する結合水が崩れるとき、その周辺の物質を構成する剤を崩壊させ、その一部を気化させてしまうことが原因で放散されています。

VOC類の発生を抑制することと、物質の耐候性・耐久性を向上させることは、物質に存在する結合水をより安定させることで両立することが可能になります。結合水が崩れるということは、 H_2O 水のまま蒸散するのではなく、 H_2O から水素が解離し、蒸散(他の物質を伴って)し、残された活性力の強いオゾン寄りの酸素(オキシダント)が内部で酸化現象を引き起こすこととなります。

VOCの発生 = 結合水が崩れ、その水素Hや水酸基OHが建材類の一部を切り取り、蒸散することにより発生している。

酸化現象 = 結合水が崩れ、水素が解離した後のオキシダントが、その周辺に(建材やその使用剤の)残る剤成分や、構成材を内部から酸化現象を引き起こしたものです。